



「コロナ下で好きに外歩
きもできず、私のカメラが
泣いています」。電話で近
況を尋ねたら、声がちよっ
ぴりかすれていた。

仙台市青葉区の阿部豊さ
ん(98)は写真歴76年のアマ
チュアカメラマン。戦後の
リアリズム写真を追求し、
今年3月で70年の歴史を閉
じた「日本報道写真連盟(日
報連)」のメンバーだっ
た。

1950年代半ば、戦争
で夫を亡くし、子どもを養
うため仙台市の工事現場で
懸命に働く女性たちを写し
た。「わずかな日当で仕事
していた。戦災復興のつら
い現実を伝えたかった」と
組み写真にまとめ、日報連
から絶賛された。
最近の阿部さんのテーマ
はもつばら、祭りや暮らし
の中で躍動する人たち。若
い時分から「ヒューマン・
インタレスト(人間に対す
る興味)」を信条にしてき
たという。
「ずっと外出を控えてき
たので私の腕はウズウズ。
『写欲』はまだあります」。
「生涯現役」は阿部さんの
ためにあるような言葉。衰
え知らずの情熱を抱き、デ
ジタルカメラやパソコンを
使いこなす姿は、若造のわ
が身にはキラキラと輝いて
映る。(写真映像部次長
門田勲)